私たちの町の文化財

■第10話　通潤橋建設の功労者、布田保之助の墓

万日山南麓には、幕末から明治時代の初めに活躍した布田保之助という人物の墓があります。墓は大正7年に一族によって建てられました。熊本県民なら大半の人が知っている通潤橋ですが、この橋の建設に尽力した人物が布田保之助でした。保之助は、享保元年（1801）に、上益城郡浜町（現山都町）に生まれました。その後、矢部手永の惣庄屋（現在の村長に近い役職）を29年と長きに渡り勤めることとなりました。その中でも最大の事業が、通潤橋の架橋でした。通潤橋建設の目的は農業用水の確保で、水源に乏しい台地上に通水することは、農業生産の拡大に大きく貢献しました。保之助は、この一世一代の事業を成し遂げるために、矢部手永の資金だけでなく、細川藩からも資金を借り入れました。当然、莫大な資金を借り入れることから、当初は藩から様々な懸案事項を指摘されました。これに対し保之助は、「御受申上候覚」を記して明確な意思を示しました。この揺ぎ無い信念は、徐々に周囲の理解も得られ、多くの人が協力を申し出ることとなりました。いまだかつて無い大工事は難航を極めましたが、優秀な石工集団や数万人を超える人夫の協力もあり、無事工事は成功しました。通潤橋は現在、国の重要文化財に指定されています。

熊本市文化振興課　藤島　志考氏

万日山の西や南斜面には通潤橋建設の布田保之助や肥後熊本藩学者の大塚退野・医師の村井琴山などの墓があるモン

平成29年10月　みにくま第174号に掲載